

東洋の思想と宗教 第三十七號 令和二年（二〇二〇）三月 抜刷

確立期修驗道の思想と儀禮

——即傳『修驗道修要祕決集』を中心に——

宮 家 準

確立期修驗道の思想と儀禮

—— 卽傳『修驗修要祕決集』を中心に ——

宮 家 準

序

修驗道は中世末に修驗者が修行の理想とした役小角の本格的な傳記『役行者本記』の成立¹⁾、熊野、金峰、大峰の緣起や神格の説明である『諸山緣起』、『金峰山祕密傳』、『大峰緣起』、『修驗指南鈔』、『兩峰問答祕鈔』²⁾、峰入の修驗者が個別に傳えてきた三十三通の切紙をまとめた、彦山の智光・蓮覺などの作と傳える『修驗三十三通記』や、これにもとづく卽傳の『修驗修要祕決集』の成立によって確立したと考えられる³⁾。このうち『修驗三十三通記』、『修驗指南鈔』と卽傳の『修驗修要祕決集』同じく彼の『修驗頓覺速證集』ならびに天和四年（一六八四）に秀高の手になる『役君形生記』は近世期を通じて

修驗五書として重視されていた。特に『修驗修要祕決集』は近世初期にその注疏である『修驗記』、『修要鈔』が編まれたり、本書をもとに自説を展開した近世末の當山派の碩學行智の弟子行阿の『修要祕決傳講筆記』が編まれている⁴⁾。また、その字義論を展開した宥鑊の『山伏二字義』、衣體論の注疏である常圓の『修驗法具祕決精註』が著されている⁵⁾。けれども『修驗修要祕決集』に關しては、その成立過程や影響の検討や、本書に見られる思想や儀禮についての部分的な紹介がなされたものの、その全體的な検討はなされていない⁶⁾。そこで本小論では、この卽傳『修驗修要祕決集』に見られる思想と峰入を中心とした儀禮を紹介し、眞言・天台の思想との關係を指摘することにした。

I. 阿吸房即傳と『修驗修要祕決集』

即傳（生没年未詳）は日光出身の遊行修驗者で、金峰山の快譽の元で大峰山の峰入や柱源作法の切紙を授かった。そして、朋輩だった彦山の承運に誘われて、彦山に赴き、長期にわたって滞在し、智光・蓮覺などがまとめたとされる『修驗三十三通記』や、その他の切紙を授かった。さらに永正六年（二五〇九）承運からこれらを含む五十通の切紙を傳授され、それをもとに編集して『修驗修要祕決集』を完成したと考えられる⁽⁸⁾。また佛教語彙や思想を解説した『修驗頓覺速證集』、彦山の峰中修行を一二六項目にまとめた『三峰相承法則密記』、彦山傳來の切紙をまとめた『彦山修驗祕訣印信口決集』、内山永久寺傳來の『峰中灌頂本軌』所掲の切紙一二通と彦山の切紙三通をまとめた『彦山峰中灌頂密藏』、柱源の修法を中心とする『柱源祕底記』を著した⁽⁹⁾。そして彦山に長く留まって山内で授法すると共に戸隠山、白山山麓近くの那谷寺などを訪れた。また金峰山の快乗、行賀、近江飯道寺の定珍らに授法した。この他、三輪山、高天寺など當山正大先達にも授法している。こうしたことから、彼は修驗道を確立した修驗者と目されるのである。

ところで彼は彦山に長く滞在したが、永正六年（二五〇九）に承運から五十一通を傳授された印證状には日光山住客先達阿吸房即傳と記している。また、彦山を出て戸隠、白山、近江など巡錫しているように各靈山で客僧として遇された修驗者で彼自身もそう自認していたと思われる。またその自稱の阿吸房は「阿字」の教えを吸収した修驗者で、即傳は天台本覺思想の「即」すなわち「不二」の思想を體得し、それを實現することを自己の目的と捉えていたとも思われるのである。そして本書『修驗修要祕決集』の書名は、修驗の「要」（かなめ）を説いた祕決を集めたものと解することが出来る。そこで、本小論では、本書を修驗道確立期に實際にその行法を確立した修驗者がその要をまとめたものと位置づけて、左記の目次に傍線を付したその主要なものをとりあげて、その要點を紹介することにした⁽¹⁰⁾。

『修驗修要祕決集』目次

卷上〔衣體分十二通〕

- | | | | | |
|----|-----------|----------|-----------|---------|
| 事 | (4) 結袈裟之事 | (5) 法螺之事 | (6) 念珠之事 | (7) 錫杖 |
| 之事 | (8) 緣笈之事 | (9) 肩箱之事 | (10) 金剛杖事 | (11) 引敷 |
| 之事 | (12) 脚半之事 | | | |

〔淺略分七通〕 (1) 依經用否事 (2) 修驗宗旨大意事 (3) 三種卽身事 (4) 三種問答事 (5) 修驗用心事 (6) 邪正分別事 (7) 世界建立事

卷中〔深祕分七通〕

(1) 山伏二字之事 (2) 臥伏二字之事
(3) 四種名義之事 (4) 三身山伏之事 (5) 寶冠問答之事
(6) 不動十界之事 (7) 法螺兩緒之事

〔極祕分七通〕

(1) 十界修行事 (2) 峰中床堅事 (3) 峰中床精事 (4) 峰中闕伽事 (5) 峰中柱源事 (6) 峰中小木事 (7) 峰中碑傳事

卷下〔私用分七通〕

(1) 灌頂啓白事 (2) 正灌頂大事 (3) 峰中床定事 (4) 入峰印證狀事 (5) 峰中血脈事 (6) 峰中小柴事 (7) 螺縮印信事

〔添書分七通〕

(1) 役行者略緣起 (2) 役行者尊形事
(3) 阿字門回向事 (4) 靈供作法事 (5) 五箇問答事 (6) 入峰三祇事 (7) 修驗類字

〔最極祕分三通〕

(1) 修驗道四重阿字大事 (2) 修驗道阿字八箇證義 (3) 三有六大事

このうち卷上・衣體分十二通、淺略分七通、卷中・深祕分七通、極祕分七通までは『修驗三十三通記』とほぼ同じである。

確立期修驗道の思想と儀禮（宮家）

ただし、世界建立事、峰中床堅事、峰中床精事、峰中柱源事、峰中碑傳事は『三十三通記』には見られない。『三十三通記』にはこのかわりに「體相用三大之事」、「無作三身之事」、「無相六度之事」、「本有灌頂事」、「捨身求菩提事」が入れられている。密教に關するものをのぞき、峰中作法が加えられていることが注目される。なお本書に付加された、卷下の私用分七通は峰中灌頂など、添書分七通は役行者、葬祭、修驗類字などから成っている。

ところで、『修驗修要祕決集』は元祿四年（一六九二）に不慧が校訂して刊行した際の序文「修驗切紙發題」によると、古來口傳とされた作法、切紙を彦山の智光、蓮覺がまとめたが、これを受けて即傳が大永年間（一五二一—二八）に五十通にまとめて本書を作成したとしている。ただ元祿年間（一六九二）に刊行の際に不慧が最極祕分三通を略し、若干の錯誤を校訂して、この序文を付して、刊行したとしている¹⁾。なおここで智光・蓮覺がまとめたものが『修驗三十三通記』で、大永年間に即傳が作成したこの『修驗修要祕決集』は、この『三十三通記』も含んだ彼が承運から授かった五十通をもとにして完成したと考えられる。また不慧が刊本の作成に際して省略した最極分三通とは、『彦山修驗祕訣印信口決集』の最初

に所掲の「修驗道四重阿字大事」、「修驗道阿字八箇證義」、「三有六大事」とされている。¹²⁾そこで本論文ではこのうちの前二者を考察の対象とした。

なお、この五十一通の切紙（「分」と表記されている）のそれぞれには授受關係は全く記されていない。ただ、その本文中に「本記曰」、「祕記曰」、「傳記曰」、「御口説曰」との記載が認められる。この「本記」は十四世紀前期の彦山の流傳、「祕記」は一四世紀後期の蓮覺、「傳記」は一五世紀初期の智光、「御口説」は一五世紀中期の即傳の師阿光をさすと考えられる。

そして即傳がこれら先師の切紙を引用、參照して、本書の各「分」を作成したと考えられる。ただ本論文ではこの彼らの引用の紹介は割愛して、これらをもとに作成した即傳自身の考えを示すために、それぞれの「分」の要旨に焦點を置いて、以下字義、依經、本尊、役行者など思想一般、字義・衣體に見られる思想、峰入を中心とした儀禮について紹介する。その際、出來得る限りそこで用いられる佛教語について解説する。¹³⁾その上で修驗道をいわば寓宗とし、即傳自身もそれに通曉していた眞言、天台思想との關わりについて検討することにした。

II. 即傳の思想

一. 修驗宗旨（淺略分二）

修驗道の宗旨は無作三密（身、口、意のあるがままの境地）の法義、十界一如（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界に遍在する根源的な原理）の妙理である。なお即傳は『修驗頓覺速證集』で各宗の立義を紹介した際に修驗は十界一如を旨とするとしている。¹⁴⁾そして、その状態は金剛界胎藏界兩部本具の直體で、それに則して即身頓悟を内證することを目的としている。換言すれば、迷悟を超克し、有無を離れて色心（物と心）不二、凡聖一如の境地に入ることにある。というのは諸法は阿字本不生（萬物が本來的に眞實で大日如來の自内證）で、六大（地・水・火・風・空・識）、四曼（大・三昧耶・法羯磨）の體性だからである。また眞理は自性の本源なので、自らの妄心を滅して心を鎮め、自性清淨心に目ざめることが必要であるとしている。なおこの修驗の教えは佛教を借りず、文字を立てず、以心傳心の形で傳えるべきものとしている。

二. 依經（依經用否、淺略分一）

佛教の諸宗ではいずれも特定の經典を所依としている。こ

れに對して修驗道ではその當初から無作（自然そのまま）と本覺（究極の悟り）の體性を持ち、六大法身の極意に立つ宗教ゆえ、筆墨では記し得ない法爾常恆（自然のかわりないさま）を依經としている。具體的には木にそよぐ風の音、砂石を打つ波の音を法界の音聲として崇めている。また修驗行者の自性は金胎不二（自身即如來）で、この佛心をもとにしているので、記された經を所依とする必要はなく、むしろ自身の悟りが經の爲の所依になるとする。それ故、修驗者は自身是佛と悟り、自身に本有金剛の法身を證得しなければならぬとしている。要約すれば、修驗者自身が自然の音聲の中で得る悟りが依經であるとしているのである。

三．本尊觀（不動十界、深祕分六）

修驗道では不動明王を本尊としているが、即傳は山伏は不動明王の直體で不動明王と同様に十界を本具としているとする。そして不動明王の字義は「不」は胎藏界大日の阿字本不生の眞理、「動」はカン字（不動の種子）の徳力が三世に及ぶこと、「明」は智慧明了、「王」は化用自在を意味する。なお「聖不動經」には「不動明王は衆生の心想の中に住したまう」とある。その像容は背後の火炎は地獄、黑醜の身體の色は餓

確立期修驗道の思想と儀禮（宮家）

鬼、迦樓羅（天狗の形像）は畜生、右手に持つ利劍は修羅、掛衣は人間、腕にまく環は天、袈裟は聲聞と緣覺、寶索は菩薩、頂は蓮華というように十界一如の體性を示すとされている。それ故、修驗行者はこのことを觀じて不動明王の三昧に入り、自身が不動明王と同様の十界一如の體性にならなければならぬとしている。要するに修驗者が不動明王を自己の心の中に宿し、それと一體になることを求めているのである。

四．役行者とその像容（添書分一・二）

役優婆塞^④は毘盧遮那佛の變化、不動明王の分身で、密號を法喜菩薩といい、金剛山（葛城山）で法を説いている。彼は月氏國（中央アジア）では釋迦如來から心印を授かつた迦葉釋迦の十大弟子の一人、唐では生滅不二の祕術を修した香積仙人、日本では役優婆塞として生まれたという。實際には大和國葛城郡茅原村の役公氏の出身で、母が獨鮎を呑んだ夢を見て受胎し、妊娠中は辨才天を思わせる青衣の女性に助けられ、舒明天皇三年（六三二）に出生した。七歳の頃から毎日不動明王の慈救呪を一〇萬遍唱えて修行した。青年期には佛・儒を學んだ。或時五色の雲光に導かれて攝津の箕面山に行き、龍樹から無相三密の印璽を授かり、入峰修行の祕法を習得し

た。そしてこれを期に箕面の嚴窟で三〇年間にわたつて藤の皮を衣とし、松の實を食べて修行した。文武天皇の大寶元年（七〇一）七一才の時、雲に乗つて渡唐した。ただ毎年七月には日本を訪れて、日本各地の靈山で修行したとしている。

この縁起を見ると、『續日本紀』所掲の大寶三年（六九九）に役小角が韓國連廣足の讒言で伊豆島に配流されたとの記事や『日本靈異記』にあげる葛城山と金峰山の間の架橋を試みる話などは全くふれられていない。そして前生譚と渡唐後も日本を訪れて箕面や全国各地の靈山で修行したことが強調されている。⁽¹⁾

役行者の尊形（添書分二）については、まず役優婆塞は金胎兩部不二の直體で不動明王の體相を示すとす。そして具體的には八尺の長頭襟は胎藏界の八葉、右手の獨鈷は斷惑證理の智劍、左手の念珠は大悲化他の寶索、六輪の長い錫杖は六道の衆生を救濟すること、口を開いているのは陀羅尼を誦していることを示す。身體にまとつた藤の皮の衣は無明業盡の火焰である。そして足に穿く鐵駄は法性常住の阿字不壞の盤石、行住坐臥は後述する床堅の形儀を示している。

左脇の禪童鬼は義覺とも呼ばれ、矜羯羅童子を意味している。その左手に持つ水瓶には胎藏界の悲水が入っている。體

色の青は悲水の色で口を開いているのは胎藏界のア字を示している。一方右脇の智童鬼は義賢とも呼ばれ制吒迦童子を意味する。體色の赤は智火の色、口を閉じているのは金剛薩埵のウン字を示す。體色の赤は智火、右手の斧は金剛の智劍を示している。背に負う笈と肩箱には峰中灌頂などの秘具が收められている。なお義覺、義賢は役優婆塞の五大弟子の上座二人で、矜羯羅童子と制吒迦童子は不動明王の兩脇侍で、これは役優婆塞が不動明王の體相を示すとしたことに對應している。

五・成佛論（三種即身事、淺略分三）

成佛に關しては天台宗では三因佛性（正因佛性 \parallel すべてのものに本來備わっている眞如の理、了因佛性 \parallel 理を照らしあらわす智慧、緣因佛性 \parallel 智慧を起こす緣となるすべての善行）を説き、密教では三種の即身成佛（理具 \parallel 肉身の姿が大日如來の法身そのものである、加持 \parallel 衆生の本覺の功德が如來の三密の加持力と相應して、一切の佛の働らきをなしとげる、顯得 \parallel 自身が三密の修行を成就して法性の功德を顯得する）を立てている。これに對して修驗道では即身成佛・始覺、即身即佛・本覺、即身即身・始本不二の三種の成佛を説いている。このうちの即身成佛と即身

伏		山			
イ	犬	三部	三諦	三身	豎の三畫
		金剛部	假諦	報身	左
		佛部	中諦	法身	中央
		蓮華部	空諦	應身	右
		三部即一	三諦一念	三身即一	横の一畫
衆生所具の本有の法性		衆生所起の妄想・無明			
無明法性不二		三即一			

【圖表一】

山伏の山の字は豎三角を下の横一畫で結び、伏はイ（人）と犬からなっている。これを次項のように説明する。

Ⅲ. 字義にもとづく思想の説明

一・山伏二字義（深祕分一）

即佛は上記の天台宗の正・了の佛性、眞言宗の理具・加持の成佛と類似しているが、即身即身は修驗獨自のもので無作三身（本來はおのずから佛である）の直體となつて、常境無相、常智無作の内證を得ること、換言すれば、修行者が即座に當位佛果の源底であることを示す獨自のものとしている。

三身の報身は菩薩がその願いと行に報われて得る佛身、法身は眞如の悟りそのもの、應身は衆生を導く爲に相手に應じて現れる佛の身體を示す。三諦は三つの眞理をさし、空諦は諸法は因縁によつて生じてそれ自身の自性がなから空、假諦は空は假名ゆえ實態視してはいけなから假、この空諦をさらに空じた處にあらわれるのが中諦であるとする。三部は密教で胎藏界を佛部、金剛部、蓮華部に三分していることを示している。そして、このそれぞれの三者を下の一畫で結ぶことによつて、三身即一、三諦一念、三部即一をあらわすとしている。次に伏の右の犬は衆生所起の妄想・無明で、伏のイは衆生所具の本有の法性で、兩者で無明法性不二を示すとしている。

そしてこの山伏の二字をもとに、修驗道の字義は、行者の一身に十界を觀じ、その行住坐臥の舉動が無作三身（三身は修行をへることなくおのずから備わっている）の妙用で、語る言語は法爾常恆の法樂であるとしている。このように修驗道では成佛を求めずして成佛し、凡身を改めずして覺位を證するとしているのである。

ところで一四世紀初期になる光宗（一二七六一—三四七）の『溪嵐拾葉集』卷八「山王二字釋之事」の項には山王の山の

字は縦の三畫(山)を横の一畫で繋いでいる。また王の字は縦の一畫が横の三畫を結んでいる。これは山王の文字を通して縦にもあらず横にもあらず一にもあらず一心三觀であることを示すとしている。また山は衆山第一の須彌山、王は諸法の王である法華經を示すとしている。また同書卷三「天台所立宗旨」では、この一心三觀は、空・假・中の三諦をひと思いのうちに一時に祈念するという天台教學の基本を示すとしている。⁽¹⁹⁾

二・山臥(臥伏二字、深祕分二と四種名義、深祕分三)

ヤマブシの漢字表記の一つ「山臥」は未修行の行者に用いるもので、この「山」は母胎八部の内團、本有八葉の蓮臺、「臥」は不苦、不樂、無相(執着を離れた境地)、眞如(ありのままの姿)、本覺(究極の悟り)、無作(自然のままであること)の法體を意味する。そして總じて本有(本來的な)本覺(究極の悟り)をさしている。次に「山伏」はすでに峰入を終えた行者に用いる。すなわち母體である金胎兩部の峰に入って折伏、攝受の修行をすることによって自性の心蓮の法體を開覺した修生(修行によって始めて生ずること)・始覺の行者をさしている。それ故、修行門では山伏、法體門では山臥が勝れている。た

だ始覺を得て本覺に還る故、全體としては山臥の方が勝れているとしている。

この山臥・山伏に對して、修驗は「修」は修生・始覺、「驗」は本有・本覺を意味し、全體としては修生・本有雙修、始覺・本覺雙修を示している。これに對して一所不住の客僧は無所住の心地に住し、阿字本不生(萬物は本來的に眞實で宗教的に見ればすべては大日如來の自内證に他ならない)の覺位を證したことを意味している。それ故この四者の優劣の順序は、客僧、修驗、山臥、山伏となるとしている。

なおこの項で、佛教諸派では「宗」を用いるのに對して、修驗道では「道」を用いることを比較する。そして、宗と道では「宗」は一家一宗の我法で狭いのに對して、「道」は諸宗融通ゆえ廣い、また道の字を構成する「首」は生、「乚」は死を意味し、兩者で生死始終の義を示す。修驗道は生死去來のことを覺つて中道不生の心地に達することを意味するとしている。

IV 衣體に見られる思想

一・身體——髮形 三身山伏(深祕分四)

山伏の身體に託した思想の説明には、長髮、摘髮、剃髮と

結びつけた説明がある。まず長髪の山伏は法身形とする。そしてこの髪形は凡聖の性相（本體と現象）、本有常住の理體で毘盧遮那如來の遍一切處である。これは十界の依正（環境と身心）をそのまま法身の身體としていることを意味している。次に一寸八分の長さ髪を摘んだ山伏は報身形の山伏である。この山伏は胎藏界八葉九尊の峰入、金剛界九會の峰入、計一八の峰入をして、實修實證の修因感果の智體となったことを示すとしている。なおここに見られる數を教義と結びつける方法は鎌倉末から天台本覺論でなされた「數法相配釋」と呼ばれる教義解釋で、後述する衣體分十二通などでも導入されている⁽²⁰⁾。最後の剃髪した比丘の髪形の山伏は三乘（聲聞、緣覺、菩薩）同見、隨類應現の色身（身體と心）を示している。そして三者の中では長髪法身形の山伏を最良としている。

二・衣體（衣體分十二通）

衣體分十二通は『修驗修要秘決集』のみならず『修驗三通記』でも最初にあげられている。ただ『修驗頓覺速證集』には、この十二の他に檜扇、蓑鞋、柴打、走繩を加えた十六道具をあげている。なおこの衣體分は「彦山修驗傳法血脈」⁽²¹⁾にあげる即傳の師である阿光の師にあたる智光がまとめた

確立期修驗道の思想と儀禮（宮家）

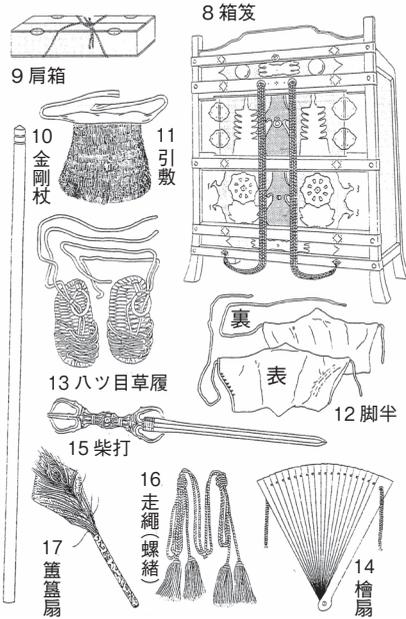
されるものである⁽²²⁾。もつとも一五世紀後期には、兜巾を五智の當體、篠懸を九會曼荼羅、蓑鞋を八葉の蓮臺と記した能の「安宅」が成立している⁽²³⁾。また聖戒編の『一遍上人繪傳』では時宗の持物十二道具とあわせた教えが説かれており、これらの影響があつたと考えられる。以下、圖をもとにしてそれぞれについて説明する。

【圖表2】



修験の衣體圖

宮家準『修験道』（講談社學術文庫、二〇〇一年）一四〇—一四二頁



i. 頭襟

頭襟は大日如來の五智（法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智）を示す化他利物の寶冠で、その十二の髻は十二因縁（無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死）が卽十二聖位であることを示している。なおこれを頭の前八分に着用するのは、行者が不動明王の頂上の八葉を身につけていることを意味している。そしてこの頭襟を頂くこ

とよって煩惱、業、苦の三業を法身、般若、解脱の三徳に轉じることが出来るとしている。なお頭襟には長頭襟、折頭襟などの種類がある。

ii. 斑蓋

斑蓋は佛頂莊嚴の天蓋で慈悲覆護を示し、これを被った行者が母胎に抱かれて、胎内五位（羯刺藍・受胎後七日、頰部曇・第二の七日、閉戸・第三の七日、健南・第四の七日と第五の鉢羅奢佉・以降出生まで）をへて出胎することを意味する。なおその形の圓相は金剛界の月輪、上方が八葉になっているのは胎藏界の八葉で、兩者で金胎本具の内證、二滴和合を表示している。

iii. 鈴懸

峰入の法衣は金胎兩部の曼荼羅を意味する。すなわち九布から成る上衣は金剛界九會、八布の袴は胎藏界の八葉で兩者で金胎不二を示している。また鈴懸の鈴の字は五鈴鈴で、その音は金胎不二、自性法身の説法をあらわしている。なお衣に盤石を摺り込んだ摺衣は行者が不動明王の盤石に住し、不動と一體不二であることを示す。また正先達が着る柿衣は本有毘盧遮那の極位にあつて、一切の衆生を化度することを示

し、神前で山伏が着する白色無紋の淨衣は和光同塵、隨緣利物を示している。

iv. 結袈裟

結袈裟は行者が一身に十界一如、三身圓滿の妙理を具現していることを示している。その形式は九條袈裟だが、九條は九界（十界のうち佛界をのぞく）、行者が佛界でこれを着することによって十界を具足することを示すのである。また不動明王が十界の總體であるので、不動袈裟ともいう。袈裟につける六房は六道の衆生を化度することを示す。なお春、秋、夏の峰入を終えた一僧祇の山伏の房は白色だが、白は全ての色に染まるので隨緣眞如、度衆と新客の房が黑色なのは黑色は他の色に染らないので自性獨滿を示す。當山派の山伏は五つの金色の打越がある磨紫金袈裟を着するが、この五つの金の打越は智慧（般若）をのぞく五波羅蜜を示している。なお結袈裟の着脱の際には「結袈裟威儀 歸入阿字門 解結袈裟威儀 卽斷輪廻道」と唱える。

v. 法螺と螺の緒

法螺は金剛界バン字の智體で法身說法の内證である。その

確立期修驗道の思想と儀禮（宮家）

音は六道の妄夢をさまして中道不生の覺位に導くもので、如來の說法とされている。また獅子吼になぞらえられ、この音を聞くと諸々の煩惱や邪見が滅して自性（それ自體の定まった本質）の佛性に目ざめることが出来る。法螺を吹く前には「三昧法螺聲 一乗妙法說 經耳滅煩惱 當入阿字門」と唱えて、吹き口を三度打つが、これは三身說法を示すという。なお吹き方の種類と意味には、宿入の法螺（十音）は十界隨類の說法、宿出（八音）は八正道（正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定）で、駟出（六音）は六度（六波羅蜜）などがある。なお行者が腰にまく二本の緒のことを法螺の兩緒（走繩）とも呼んでいる（「法螺兩緒之事」、深祕分七）。これは阿字出入の命息で二バン（金剛界）二水和合の寶塔を示している。この右の緒は「螺の緒」と稱して金剛界の智體、左の緒は「曳きまわし」と呼び胎藏界の理體即佛の意で、兩者で因果の圓塔、理智法身を示すとしている。これに關して日藏（道賢とも（九〇・五一八九五）金峰山の修驗者）はこれを腰輪と腹輪に分け、それぞれの意味を次のように捉えている。

腰輪…地、胎藏界、ア、方、色、理、父
腹輪…水、金剛界、バン、圓、心、智、母

不二

そしてこの兩緒を腰と腹の間に巻くことによつて上記の兩者の不二、行者の六大が毘盧遮那如來の六大になると解している。また聖寶（八三二—九〇九、醍醐寺開基）は二本の緒は金胎兩部、能性の父母をさし、これを結ぶことによつて兩部冥會の内證、理智不二、金剛不壞の法身を生じるとしている。なお行者は螺の緒（父、金剛界）、曳きまわし（母、胎藏界）を腰に巻くことによつて、その子として誕生することを示すともされている。

vi. 最多角念珠

念珠の念は己身本覺の智、珠は實相眞如の體をなす。また念は煩惱、珠は法界の圓理で、煩惱と菩提が一體不二であることを示す。なお珠の形の最多角（算盤の珠狀）は智劍、その數一〇八は一〇八煩惱を示し、これを摺ることによつて一〇八煩惱を催滅して菩提の妙果を證得するとしている。

vii. 錫杖

錫杖は法界の總體で衆生覺道の智杖である。修驗者は左右六輪の菩薩の錫杖を用いる。この六輪は六波羅蜜（布施・持戒・忍辱・精進・靜慮・智慧）をあらわす。錫杖の上方の圓弧

は周圍無際の大虛、圓弧上に一つ、中には三つ、計四つの五輪塔がある。上の一つは法界の塔婆、中の三つは心、佛、衆生の五大で、この三者は一體の己身實相を示している。また圓弧四方の半月形の四面は四生（胎生、卵生、濕生、化生）を示し六輪とあわせて、六道四生の群迷を救うことを示している。なお六角の柄は六道の巷にさ迷うことを意味する。この錫杖を振ることによつて一切衆生の六道輪廻の眠りを覺して一佛會に歸入させるのである。またこれを聞く者は三業所犯の罪障を消滅して速やかに菩提を證することが出來るとしている。

viii. 緣笈

峰入の笈は十界の依正（環境と衆生の身心）を含藏した胎藏界の阿字の理體。萬法總持の表示である。なお笈の中には笈の實と呼ばれる五穀が入られている。笈は母胎を示すとされ、五穀は胎兒に比せられている。なお新客が峰入の際に笈を背負うのは母胎に抱かれていることを示している。そして笈板の縦一尺八寸は母の十八界、横の一尺二寸は十二因緣、各一尺の兩足の左は衆生の、右は佛の十界で、兩者で凡聖互具の十界を示すとしている。

ix. 肩箱

峰入の際、笈の上に峰中の灌頂などの祕書を入れて乗せる箱を肩箱という。金剛界バン字の智藏とされる。衆生を度する定（瞑想）慧（悟り）和合の姿を示すという。なお胎藏界の阿字を示す笈の上に、金剛界バン字の肩箱を乗せることによつて金胎不二を示している。

x. 金剛杖

金剛杖は度衆が持つ上端が劍頭で、下が圓形のその身長にあわせた長さの杖である。上端の劍頭は金剛界バン字の智藏で下の圓形は胎藏界の地大で兩者で金胎不二の塔婆を意味する。なお役行者の三昧耶形ともされる。この他に正先達が所持する檜杖と新客の用いる擔木がある。檜杖の檜は火、智で、火は衆生の煩惱を焼きつくす事を示している。擔木は新客が毎日三荷の闍伽水を闍伽の先達、三荷の小木を小木の先達に納める荷ない棒である。

xi. 引敷

引敷は修験行者が尻にあてる鹿や熊の皮の座布團とも云えるものである。これに座る能乗の行者は法體、所乗の獅子は

確立期修験道の思想と儀禮（宮家）

無明で能乗・所乗冥會一體、法性即無明、凡聖不二を示している。

xii. 脚半

脚半はいずれも黒色で、春の熊野から吉野の順峰・胎藏界・從因至果の峰では上の平らな筒脚半、秋の吉野から熊野の逆峰・金剛界・從果向因の峰には上が劍先の脚半を用いる。なお脚半をしぼる上の紐は上求菩提、下の紐は下化衆生を示している。

V. 儀禮——峰入を中心に

一. 當峰、大峰山（灌頂啓白事、私用分二）

灌頂啓白文は冒頭に當峰は金胎兩部の諸尊聖衆の座す淨刹で、自然がそのまま曼荼羅であるとされている。具體的には峰や嶽は金剛界、谷や窟は胎藏界、嶺の嵐、谷の流れの音は法身の說法であるとしている。なお當峰の舊字の當は田を尙ぶ峰（山）を意味し、水田稻作の民への呼びかけを示すと考えられる。具體的には吉野川、その下流の紀の川の水源の水分子である吉野（金峰）が想起される。役行者はこの當峰で、かつて龍樹が南天竺の鐵塔で金剛薩埵から授かった印璽をも

とに毘盧遮那佛の内證を得て即身頓悟の祕法を修したとす。爾來この當峰に入る行者は凡體のまま胎藏界の八葉の中臺に至り、金剛不壞の法身となることが出来る。このように峰入は事理俱密(事相と理論が共に具備した密教の教え)の内證不二の妙行であるとしている。なおこの啓白文のあとには四度灌頂(不動灌頂ともいう)として、入宿灌頂、業秤灌頂、穀斷、正灌頂をあげ、この四度灌頂を受法することによつて當峰の先達をはじめ一切の人、萬物は自他ともに阿字の佛土に同入するとしている。

ところで大峰山では具體的には、藏王權現を祀る吉野側の北半分を金剛界の峰とし、熊野權現を祀る熊野側半分の胎藏界の峰としている。この比定はすでに鎌倉初期になる『諸山縁起』に見られ、同書では具體的に峰中の各靈地に祀られた曼荼羅中の諸佛諸尊があげられている。⁽²⁵⁾

二・峰入(峰中碑傳事、深祕分七)

峰入の種類にはその時期に應じた春の熊野から吉野への順峰と、秋の吉野から熊野への逆峰、夏の金峰山の奥の小笹までの峰入である順逆不二の峰がある。そして春峰は從因至果の峰・無明、秋峰は從果回因の峰・法性、夏峰は非因非果(從

因至果でも從果回因でもない)・無明法性不二の峰としている。なお即傳の『三峰相承法則密記』では、彦山では春の順峰は南方彦山胎藏界の上求菩提・從因至果の峰、秋の逆峰は北方(龜山金剛界の下化衆生・從果回因、夏の順逆不二峰は神山・胎金和合峰・自他一如・非因非果峰として、この三峰修行をおえた山伏を一修行の山伏あるいは一僧祇の山伏と名づけている。⁽²⁶⁾

三・十界修行(十界修行事、極祕分一)

この峰中の修行として本書には六道と四聖からなる十界に充當された次の十種の修行があげられている。このうちの六道は i 地獄(業秤、罪障の重さを計る―修行内容、以下同様)、ii 餓鬼(穀斷)、iii 畜生(水斷)、iv 修羅(相撲)、v 人(懺悔)、vi 天(延年の舞)である。次の四聖は教えを聞くもので、それぞれ次のように位置づけられている。vii 聲聞(四諦、苦諦即法身、集諦即菩提、滅諦即涅槃、道諦即自性と觀じる)、viii 緣覺(十二因緣・苦と惱みの原因とされる無明・行・識・名色・六處・觸・受・愛・取・有・生・老死を觀じて生死を覺る)、ix 菩薩(大悲を發して布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六度を無想の六度と觀じて)、x 佛(自己の色身が胎金本具の曼荼羅ゆえ、行者の當體がそ

のまま毘盧遮那佛の覺體となつたと悟る）である。なおこの十界修行とあわせて、峰中では次の床堅、小木、闕伽、正灌頂、柱源供養法の傳授などがなされている。

四・床堅（峰中床堅の事、極祕分二）

床堅の作法は結跏趺坐した行者の頭上で腕比（二尺二寸の小柱）と小打木（五寸の小柱）を打ちあわせて、床堅の頌「悪罵及捶打 皆悉當能忍 我今成佛身 端座思實相」と唱え、順峰の時は右手を下げ、左手を上げ、逆峰の時は左手を下げ、右手を上げ、夏峰の時は両手を上下して、【圖表3】のよう

に身體の各部分にパンの種子と一を觀じ（圖に示すように身體の各部に大日如來の種子と一の字の各部分に身體の各部分と五大を觀じ）、床堅の觀文「我即アピラウンケン（中略）心佛衆生無差別 不改自身名即身 覺悟此分爲成佛」を授かっている。

【圖表3】



空風火水土

頂額心腹健

五・峰中闕伽水（極祕分四） 生善の法

闕伽は梵語で譯語は無垢、水は生活の根源でその本性は清淨である。水には五智の徳があつて波浪の音はその説法であるとする。峰中の闕伽作法では新客が擔木の兩端に下げた闕伽桶に闕伽水を入れて、毎日三時の供養に用いる法華水の三荷の闕伽水を闕伽の先達に納めて、寶篋印塔を意味する闕伽札を授かっている。また闕伽桶は左が金剛界、右が胎藏界、擔木は一切衆生のパン、金剛界大日如來の種子を示すとして

いる。なおこの時に授かる闕伽水の頌は「以_レ淨淨水 洗浴煩惱身 五智德顯現 心諸佛圓滿」である。なおこの闕伽作法は五智の理徳に住する生善の法とされている。

六・峰中小木（極祕分六）

小木は有漏（煩惱を持つ）の依身を焚燒して無漏（煩惱を消除した）の佛地に導く採燈の壇木である。新客はそれぞれ一尺八寸の長さの小木（衆生の十八界すなわち人間存在の十八の構成要素である眼・耳・鼻・舌・身・意の六根、色・聲・香・味・觸・法の六境、六根それぞれの認識作用を示す六識をあわせたもの）を繞索で三匝半に束ねて擔木の兩端に下げて、毎日小木の先達に納めている。なおこれを三荷ずつ納めるのは、三業所犯の

罪垢を燒盡し三身萬徳の覺體を證得することを意味している。また三匠半の三匠は三身圓滿、半は成就の義である。なおこの小木を納めた時に授かる小木の頌は「四大(地・水・火・風)和合身 骨肉及手足 如薪盡火滅 皆共成佛道」である。

修驗独自の採燈護摩は爐壇に壇木を組みあわせ、その間に小木や杉葉をつめて斷燒するものである。この壇木は衆生の大骨、小木は小骨で護摩壇は棺桶の形をあらわした。そして、先達は金剛界五佛の三摩地(三昧)に住して、東方阿闍の木を西方彌陀の金で切り、中央大日の大地に置き、南方寶生の火を以つて燒き、北方釋迦の水を注ぐと觀じて、無明煩惱の薪を燒盡して本有の五佛の心地に歸せしめると觀じている。なおこの採燈護摩は滅罪の法とされている。

なおこの項で、入峰修行の軌則は、胎内(斑蓋)、胎外(正灌頂)、生起(闍伽)、死滅(採燈)から成るとしていることに注目しておきたい。

七・峰中正灌頂、柱源供養法の大事(極祕分五)

正灌頂は深仙の宿で穀斷滿行の日の未刻(午后一時―二時)に授けられるとしている。けれども、上記の表記の次にあげられているのは「柱源供養法の大事」のみである。そこで以

下これとあわせて『柱源祕底記』所掲の次第と、それを再現したとされる一九六九年九月七日の聖護院の傳授會の調査記録をもとに簡單にまとめておきたい。²⁸⁾ その作法はまず床堅の座位にたいうえで、さきにあげた床堅の頌を唱える。次いで壇具六大觀で壇上に設えた壇板、柱源、源蓋、洒水器、華鬘、二本の乳木にそれぞれ地・水・火・風・空・識の六大を觀じ、作法(口傳)を修する。次に六大本具の印(虛心合掌)を結んで、その明アビラウンケンを唱える。ついで柱源誦文「能食所食二俱六大 依正一體 供養自身」を唱える。そして二本の乳木を水輪に立て、本覺讚の前半の部分「歸命本覺心法身 常住妙法心蓮臺 本來具足三身徳 三十七尊住心城」を唱える。續いて二本の乳木をとつて虛心合掌の兩掌にはさんで三度もみ、「有漏生死の依身を催滅し、本有不生の阿字に歸入す」と觀想する。そのうえで受者の法名を記した洒水器の正面の柱源をとつて虛心合掌にはさんで頸の下につける。ついで最後に舍利塔大事を修している。なおこの祕法は役行者が箕面の瀧穴で龍樹から授かったものとしている。そしてこれは入峰修行の根底で即身即佛の直位を示すものゆえ、毎日一座懈怠なく修するように課している。

VI: 眞言・天台と修驗道思想・儀禮

一・眞言宗と修驗道思想・儀禮

i. 阿字

即傳は『修驗頓覺速證集』の「諸宗立義」の項で眞言宗の立義は「阿字不生」であるとしている。そして『修驗修要祕決集』では「修驗道の根本道場である大峰を「阿字の佛土」としている。なお阿字本不生は萬物が本來的に眞實で宗教的に見ればすべてが大日如來の自内證（内心のさとり）とされている。『修驗修要祕決集』の「柱源供養法の大事」の最後に有漏生死の依身を催滅し、本有不生の阿字に歸入するとしているのはこれにあたると思われる。

ところで『彦山修驗祕訣印信口決集』には『修驗修要祕決集』の刊本では省略された最祕分、「修驗道四重阿字大事」、「修驗道阿字八箇證義」、「三有六大事」の三通がおさめられている。そこで以下この最初の二つの切紙を紹介する。まず前者の「修驗道四重阿字大事」では初重は教法すなわち文言言説などの能詮（記されたもの）としての阿字、二重は理法、陰陽未分の命息（いのち）を示す所詮（究極）としての阿字、三重は行法・刹那・無間・終命に係わる生死としての阿字、

確立期修驗道の思想と儀禮（宮家）

四重は果法、自身本具の六大と係わる不生不滅の涅槃としての阿字をあげている。このようにここでは、阿字の教えを聞き、その眞理を悟り、行じて成果を得る形をとり、最後は涅槃に到達するという四段階の阿字が示されている。

次に後者の「修驗道阿字八箇證義」では、阿字の意味内容として、次の八種をあげている。第一は六大を細密化した阿字、第二は三諦（空・假・中）のうち「空」「假」を越えた本體である「中」にあたる魂・氣を示す阿字、第三は阿字本不生、第四は有情の命息、非情の地大の阿字、第五は有情では身内を養い、非情では外にあつてこれを培う内外二養の阿字、第六は有情、非情の生死を離れる阿字、第七は有情の入息、非情の出魂の息に關する阿字、第八は父母未生已前の人間が陰陽未分の元の氣に融通する阿字で、これを本有不生不可得の阿字としている。

ii. 金剛界・胎藏界

金剛界と胎藏界の曼荼羅は密教の諸尊を系統的に配列し、その思想を全體的に示したものである。本書では大峰山系を金胎の曼荼羅とすると共に、峰々は金剛界の曼荼羅、谷や洞窟は胎藏界の曼荼羅になぞらえている。そして、峰入の基本

的な所作とされる床堅の字義の説明では、「床」は金胎兩部の曼荼羅、「堅」はそこで行者が自己の五大を法身堅固なものと確信する作法としている。さらに修驗の開祖とされる役行者の像容は金胎兩部不二の直體を示すとしていた。この金胎不二は夏の金峰山の金胎不二の峰入、山伏が頭上に被る斑蓋（圓相）が金剛界・中央の赤の圓形が胎藏界、鈴懸の上衣が金剛界九會・袴が胎藏界八葉、腰に纏う腰輪（胎藏界・腹輪（金剛界）、緣笈（胎藏界）と肩箱（金剛界）、金剛杖の上の劍頭が金剛界、下の杖の圓形が胎藏界と見なされている。さらに修驗者が始祖として仰ぐ役行者のみでなく、彼ら自體が金胎不二の存在と見なされていたのである。そしてさらにこの不二は貝の緒の腰輪と腹輪に見られたように、胎藏界・金剛界のみでなく、地・水、ア・パン、方・圓、色・心、理・智、父・母の不二に及んだのである。なおこの不二は、生・滅・淨・穢、善・惡、生・死などあらゆる二元的、相對的な概念は絕對的立場からすると決して對立するものではないとする空海の思想にも見られたものであり、これが後に天台本覺論にと展開したのである。

二・天台宗と修驗道思想・儀禮

i. 一心三觀と十界互具

即傳はさきに引用した『修驗頓覺速證集』所收の「諸宗立義」の項で天台宗は一心三觀を立義とするとしている。この一心三觀は天台宗の觀想の一つで、ひと思いの心のうちに空觀、假觀、中觀の三觀を同時に實現することをさしている。すなわち三觀は一切を空と觀じ、假と觀じ、また空も假も一であると觀ずる。一方で中觀は前二觀が別々であるとすると見解を批判し、並用することに意義があるとするとする立場である。ところで『溪嵐拾葉集』所掲の「天台所立宗旨」では空・假・中の三觀をひと思いのうちに一時に祈念することを一心三觀としていた。『修驗修要祕決集』の「山伏二字義」で山の字は空・假・中の三諦を一念と觀ずるとし、實際に結袈裟の山の形がこれを示すとしているのは、この一心三觀と結びつくものと思われるのである。なお表現は異なるが、「山伏二字之事」に見られる報身、應身、法身の三身即一、蓮華部、金剛部、佛部の三部即一も一心三觀の思想にもとづくと考えられる。

天台宗で今一つ廣く知られているものに十界互具の思想がある。これは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・聲聞・緣覺・

菩薩・佛の十の生存領域のそれぞれが他の九界を備えている。例えば地獄の衆生も佛となりうるし、佛も迷界の衆生となりうるとの思想である。『修驗修要秘決集』では峰入修行で、この十界のそれぞれに充當した十界修行をすることによって十界互具を知るとしているが、これも天台思想にもとづくものである。

ii. 不二・即——天台本覺思想

周知のように中古天台思想の中核をなすのは本覺思想である。田村芳朗はこの本覺思想を二元相對の現實をこえた不二絕對の世界を究明し、そこから現實にもどつて二元相對の諸相を不二本覺の現れとして肯定することとしている⁽³⁾。なお即は不二と同意である。

『修驗修要秘決集』では、種々の形で不二を説いている。主なものには顯密不二（宗旨）金胎兩部の不二（宗旨）、順逆不二峰（夏峰）、無明法性不二（伏の字、引敷）、凡聖不二（頭襟、結袈裟、引敷）、始本不二（即身即身、客僧）、二本の螺の緒（腰輪と腹輪）を地・水、胎藏界・金剛界、ア・パン、方・圓、色・心、理・智、父・母の不二などがこれである。

確立期修驗道の思想と儀禮（宮家）

iii. 本覺讚

『修驗修要秘決集』では「螺緒印信」や「柱源供養法」で天台本覺論の基本とされる「本覺讚」の解釋がなされている。まず本覺讚の八句の頌を、①本覺を心と法身との妙法の心蓮臺に當住し、本來三身の徳を具足し、②三十七尊の心城に住し、③普門塵數の法三昧に入り、因果を遠離し法然に具し、無邊徳海に本より圓滿に歸命すれば④還つて我が心の諸佛に頂禮せよ、と讀みくだしている。

その上で初めの三句①は胎藏界の諸尊、次の一句②は金剛界の諸尊、その次の三句③は兩部の眷屬諸尊、後の一句④は兩部の諸尊への歸依を示すとしている。また『秘記』を引いて、初めの歸命①―③は意歸、行の頂禮④は身敬を示すとしている。ここでは本覺讚を胎藏界、金剛界の諸尊への歸命と、それを内在した自身の心の諸佛への頂禮を説くというように密教と結びつけていることが注目される。

三. 修驗道の思想と儀禮

i. 十界一如

即傳はさきあげた『修驗頓覺速證集』の諸宗の立義の項では、修驗道は十界一如を立義とするとしている。この十界

一如は『修驗修要秘決集』の「修驗宗旨」の項に「修驗の宗旨とは無想三密の法義、十界一如の妙理なり」と記されていた。⁽²³⁾そして峰入では十界の一つ一つに修行を充當し、それを通して十界互具を悟ることを示していた。また修驗道の本尊であり、衆生の心相の中に住するとした不動明王は十界本具の佛とされていた。さらに修驗道の結袈裟は九條袈裟だが、この九條は九界で、これを佛界である行者が着することによって十界を具足しうるとしていた。また行者が背負う笈は十界を含藏するとしている。

ii. 生と母胎

上記の眞言・天台の教えを導入したり、それを展開したものの他は、人間の生の營みと結びついた二滴和合（斑蓋）、父母不二（螺の緒）、胞衣（斑蓋）、臍の緒（螺の緒）、母胎に抱かれる（縁笈）などが見られることが注目される。

古來修驗道では峰入をする山は靈魂の原郷とされると共に死後の靈魂をはぐくみ淨化する母なる山とする思想が認められた。そして葬場の四門になぞらえた發心、修行、等覺、妙覺の四門をへて擬死の體驗後、二滴和合（斑蓋）、母胎に抱かれる（笈）、臍の緒（螺緒）と再生を示す衣體を身につけて修

行している。なお、灌頂啓白の項に付記された四度灌頂では、一入宿灌頂、一一業秤灌頂、三穀斷正灌頂、四出生灌頂から成っていた。これらはまず懷胎になぞらえた宿に入り、これまでに犯した罪障の重さを知り、懺悔したうえで、穀斷によつて生理的におい込んだうえで祕印を授かった（自誓受戒）上で佛として出生することを示すと考えられるのである。

結

『修驗修要秘決集』の全體の構成と各「分」の内容を見ると、「最極分」に阿字、「極祕分」に峰入に關する十界修行、床堅、闍伽、小木、峰入のあかしとしての碑傳があげられていた。そして「深祕分」で山伏の字義、不動明王、「淺略分」で宗旨、依經、成佛論をあげ、上巻の最初に「衣體分」を配している。このように即傳は阿字、峰入を最も重視し、ついで山伏の字義にもとづく山伏のあり方を説いている。そしてすでに成立していた他宗と對比する形で宗旨や依經をあげ、當時世間で知られていた山伏問答に對應する形で衣體分を最初に付している。そこで最後にこの順序に即して本書の特徴をまとめておきたい。

まず峰入をする山嶽は金胎不二、阿字の佛土とされ、峰中

の宿を十界同居の道場としている。峰入の種類では、春の熊野から吉野の順峰を無明、秋の吉野から熊野の逆峰を法性とし、夏の金峰への峰入を順逆不二の峰、無明法性不二としている。夏の金峰の峰入は先達衆が小篠の宿で集會を持った故、これを重視したと思われる。なお彦山では夏の峰入の場所を神山・胎金和合の峰としていた。峰中の作法は六道になぞらえた罪の明示（業秤）、穀斷、相撲、懺悔、延年と具體的な作法の後、聲聞で四諦、緣覺で十二因緣、菩薩で六波羅蜜を教わり、その上で自身即大日如來となつたと觀じさせていた。さらにこの十界修行で十界互具を知るとしていた。また床堅では自身即大日如來と觀じ、闍伽で生起、採燈で死滅、柱源供養法で本不生の阿字になつたと觀じていた。

本尊不動明王の像容は十界を示すとし、衆生はこの不動が自己の心想の中に住すると觀じていた。山伏の字義は「山」で三身即一、三諦一念、三部即一を觀じ、「伏」では無明・法性不二を説いている。なお三諦では中諦、三身では法身、三部では佛部に重點をおいている、また山伏は始覺、山臥は本覺、修驗は始本雙修、客僧は始本不二で客僧を第一としている。これは即傳自身が客僧であつたことによると思われる。他宗との關わりでの修驗道の位置づけは修驗道は顯密不二

の教えとし、十界一如を宗旨とするが、依經を立てず自然の依正をそのまま無作本覺の體性とする。法爾常恆の經を依經とするとしている。これは自然とのまじわりの中で悟りを得ることを重視したことを示している。

開祖に假託した役行者は大日如來、不動明王の化身でその像容は金胎不二の直體とし、左右の禪童鬼、智童鬼は不動の兩童子になぞらえている。

成佛論では即身成佛を始覺、即身即佛を本覺、即身即身を始本不二とし、この即身即身によつて無作三身の直體となつたとし、ここに修驗の成佛論の獨自性があるとす。また成佛までの期間は春、夏、秋の峰入を三度くり返すことによつて三大阿僧祇劫をへたことになつたとしている。衣體分では「數法相配釋」の影響がみられるが、全體として金胎不二、凡聖不二が主潮をなしている。

以上のように衣體分の宗旨、山伏の字義、即身即身などには不二の思想が見られるが、實踐と關わる峰入のうちに六道や、四度灌頂、春・秋・夏の三度の峰入を三大阿僧祇劫に充當するなど實際に即した説明もなされている。また先達衆の集會と關わる金峰山の峰入を順逆不二、非因非果としたり、彼自身がそうだった客僧を始本不二で、阿字不生の覺體とな

つたとするなど、實際に則した説明も試みられているのである。

注

- (1) 『役行者本記』修驗道章疏Ⅲ所收。なお役行者の傳承に關しては宮家準『役行者と修驗道の歴史』（吉川弘文館、二〇〇〇年）、參照。
- (2) 『諸山緣起』『寺社緣起』日本思想大系二〇（岩波書店、一九七五年）。『金峰山祕密傳』修驗道章疏Ⅰ、『修驗指南鈔』村山修一校注『神道大系』論說編一七『修驗道』（神道大系編纂會、一九八八年）。『兩峰問答祕鈔』修驗道章疏Ⅲ、『大峰緣起』阿部泰郎・山崎誠編『熊野、金峰、大峰緣起等』（臨川書店、一九九八年）。
- (3) 『修驗三十三通記』『修驗修要祕決集』修驗道章疏Ⅱ。
- (4) 宮家準『修驗修要祕決集』の成立と展開、『修驗道思想の研究』増補決定版（春秋社、一九九九年）一〇〇五一—一〇二三頁、淺田正博『修驗修要祕決集』の注釋書としての『修要鈔』三卷と『修驗記』一〇卷とについて、『龍谷大學論集』四三六、二〇〇〇年、參照。
- (5) 『山伏二字義』修驗道章疏Ⅲ所收、『修驗道法具祕決精註』修驗道章疏Ⅰ、所收。
- (6) 上掲宮家準『修驗修要祕決集』の成立と展開、參照。
- (7) 宮家準『日本佛教と修驗道』（春秋社、二〇一九年）一四六一—一五〇頁、一六九—一八六頁。
- (8) 『山伏道付法印證狀』『彦山修驗祕決印信口決集』修驗道章疏Ⅱ・五一六一—五一七頁。
- (9) 『修驗頓覺速證集』、『三峰相承法則密記』、『彦山峰中灌頂密藏』、『彦山修驗祕決印信口決集』は修驗道章疏Ⅱ、『柱源祕底記』は神道大系五〇神社編 阿蘇・英彦山（神道大系編纂會、一九八七年）、所收。
- (10) 『修驗修要祕決目錄』修驗道章疏Ⅱ・三六五—三六六頁。
- (11) 『修驗修要祕決集』修驗道章疏Ⅱ・三六五頁。
- (12) 『修驗道切紙發題』この切紙については宮家準上掲『修驗修要祕決集』の成立と展開、參照。
- (13) 上掲宮家準『修驗修要祕決集』の成立と展開、『修驗道思想の研究』増補決定版、一〇〇六一—一〇一四頁。
- (14) 佛教語の解説については、主として中村元『佛教語大辭典』上、下（東京書籍、一九七五年）による。
- (15) 『諸宗立義』『修驗頓覺速證集』修驗道章疏Ⅱ・四四九頁。
- (16) この添書分第一の『略緣起』及び第二の『尊形』の表題は役行者だが兩分とも本文では役優婆塞となっている。なお役行者については上掲宮家準『役行者と修驗道の歴史』、參照。
- (17) 室町末になる『役行者本記』には全国各地の役行者登拜の靈山や開基寺院をあげている。
- (18) 『山王二字釋事』『溪風拾葉集』、大正新脩大藏經七六・五

二七頁。

(19) 「天台所立宗旨」『溪嵐拾葉集』、大正新脩大藏經七六・五〇九一五一〇頁。

(20) 「數法相配釋」は最澄に假託された『法界心體論』などに見られるが、鎌倉時代末から廣く用いられた。田村芳朗「天台本覺思想概説」『天台本覺論』日本思想大系九(岩波書店、一九七三年)五三九頁。

(21) 『修驗頓覺速證集』下 第二六の「山伏衣體三差別法知事」の項には衣體を、常住八相・頭襟、袈裟、鈴繫、法螺、念珠、錫杖、柴打、檜扇。斑蓋、引敷、脚半、蓑鞋。以上十二相を駈路の相・峰中の相・笈、形箱、金剛杖、走繩とに分けている。(修驗道章疏Ⅱ・四三九頁)

(22) 「彦山修驗傳法血脈」修驗道章疏Ⅲ・三一〇―三二二頁。なお『修要鈔』には「役行者人峰建立開山也。智光行者衣體建立祖師也」(『修要鈔』中の下十七丁)とある。

(23) 『安宅』西野春雄校注『謡曲百番』新日本古典文學大系五七(岩波書店、一九九八年)一三七―一三八頁。

(24) 『一遍聖繪』第一〇、橘俊道『一遍上人全集』(春秋社、一九八九年)九二―九五頁。

(25) 『諸山緣起』『寺社緣起』日本思想大系二〇(岩波書店、一九七五年)九一―一〇二頁。

(26) 「三峰相配事」『三峰相承法則密記』、修驗道章疏Ⅱ・四八八頁。

確立期修驗道の思想と儀禮(宮家)

(27) 卷下、私用分第二に「正灌頂大事」とあるが「口傳あり」とあるのみである。

(28) 「柱源祕底記」上掲、阿蘇、英彦山七九―八〇頁、宮家準「修驗道の柱源護摩」、宮家準『修驗道思想の研究』増補決定版、二一三―二三三頁。

(29) 「諸宗立義」『修驗頓覺速證集』卷下、修驗道章疏Ⅱ・四四九頁。

(30) 「修驗道四重阿字大事」『彦山修驗祕訣印信口決集』修驗道章疏Ⅱ・四九八―四九九頁。「修驗道阿字八箇證義」同上書五〇〇―五〇一頁。

(31) 田村芳朗『天台本覺論』、田村芳朗佛教學論集 第一卷(春秋社、一九九〇年)一五九―一八四頁、參照。

(32) 「諸宗立義」上掲『修驗頓覺速證集』修驗道章疏Ⅱ・四四九頁。
(キーワード) 山臥、十界一如、法爾常恆の法、役行者、十界修行